甘樫丘東麓の調査（飛鳥藤原第141次）

甘樫丘（あまかしのおか）は飛鳥川の左岸に広がる標高約150ｍの丘陵です。丘陵の東側では過去に５回の発掘調査がおこなわれています。とくに1994年の調査では、焼土層から７世紀中頃の土器とともに焼けた木材や壁土が出土し、『日本書紀』に記載された蘇我蝦夷（そがのえみし）・入鹿（いるか）の邸宅との関連が注目されました。

今回の調査は国営飛鳥歴史公園甘樫丘地区の整備にともなう試掘調査で８月から開始しています。調査地は丘の麓から北西に入り込む約6,000㎡の平坦な谷地で、遺跡の広がりを確認するために、幅５ｍ、総延長145ｍの細長い調査区を設定しました。

調査の最大の成果は、谷の広い範囲で大規模な整地層を確認したことと、７世紀の掘立柱建物を６棟確認したことです。調査範囲が限られているために建物全体を確認できたものはありませんが、１棟は桁行５間、梁行２間であること、別の１棟には掘立柱塀が付属することがわかりました。これらの建物は、すべて今回確認した整地層の上に建てられています。

『日本書紀』には、皇極３年（644）「蘇我大臣蝦夷・兒（こ）入鹿臣、家を甘檮岡（あまかしのおか）に雙（なら）べ起（た）つ」と書かれています。見つかった建物群の正確な時期を特定することはできませんでしたが、この整地層に７世紀前半の土器が含まれることは、1994年の調査で確認した焼土層とともに、この場所が蘇我氏の邸宅の候補地であることを示しています。今年度の調査は11月末に終了しましたが、建物群の年代を確定し、遺跡の全体像を解明する今後の調査が期待されます。なお、11月16日には現地見学会を開催し、4,000人以上の方が訪れました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　豊島 直博）

現地見学会の様子